国語

（問題）

2011年度

〈2011 H23050111〉

注意事項

1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。

2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 受験番号および氏名は、試験がはじまってから、解答用紙の所定欄に正確に記入すること。記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。

受験番号の記入にあたっては、次の数字見本に従い、正確にていねいに記入すること。

数字見本									
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

5 マーク解答用紙のマーク欄には、はっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	◐悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	◐悪い

6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

〔次の文章は、十二世紀に成立した『唐物語』の中の一章段である。なお、本文の後に続く部分は省略してある。〕

昔、漢の高祖と申す帝おはしけり。呂后ときこえたまふ后、恵太子の母にて、誰よりも御こころざし重く見えさせたまひけり。ほか腹の親王に、趙の隠王と申す人を、御こころざしの余りにや、帝、東宮に立てむと思しける御気色を、呂后見たまひて、あさましう、心憂き事に思して、陳平・張良ときこゆる二人の臣下を召し寄せて、「かかるいみじき事なむある。いかにしてか、この恨みを休むべき」とのたまひ合はするを、げにと思ひけむ、「かなはざらむまでも、はからひはべるべし」と答へて帰りぬ。また、この後、二人の人も、世の中の乱れなむずる事を嘆きて、おのおのはかり事をめぐらしけり。「商山といふ山に、世を遁れつつ、帝の召すにも参らで、籠りゐたる賢人四人あり。それをこしらへ出だして、この恵太子に付けたてまつりたらば、A さりとも、はづる心おはしなむものを」と思ひ寄りて、この山の中に尋ね行きにけり。四人の人、うち見つつ、驚きていはく、「何事に、いとかくあやしげなる住みかには、わたらせたまへるにか」ときこえさするに、「世の中乱れむとつかうまつれば、我らが身にまでも、嘆き深くて、この山に隠れゐむと思ふ心はべり。1 しかれども、世の中の滅び、治まらざらむ事は、ただその御心なり」B と言へるに、この人うち笑ひて、「君も我に所おき、はぢたまはむ事、いとありがたかるべけれど、むなしう帰したてまつらむも、むげに情なき様なれば、後の事を顧みず、今日ばかりは御送りに参るべし」と言へりければ、限りなくうれしくおぼえて、四人の人を具しつつ、東宮の御もとへ参りぬ。たちまちに学士といふ司になりて、振舞ひたまふべきありさまなど、細やかに教へたてまつるに、2 頼もしく思さるる事かぎりなし。かくて年立ち返る朝、東宮、内へ参りたまへる御ともに、この人ども四人、いとうやうやしく、振舞ひ気高き様にて、御ともにはべりけるを、帝よりはじめ、つかうまつる人どもも、C おのおのあやしげに思へり。帝、「これは誰にか」と尋ね問はせたまへる。御ともにはべりける人申していはく、「日ごろ召しつる商山の四皓にはべり」D ときこえさせたまひけるに、御心も臆せられて、あさましくぞ思されける。これによりて、帝、四皓にのたまはく、「我、昔より、汝に国のまつり事を任せむと思へり。しかれども、敢へて聴かざりき。しかるを、若くいとけなき東宮に従へる心、知りがたし」。四皓申していはく、「君は御心かしこくて、世の中を平らげ、国を治めたまへども、人をあなづり、賢きをもかろめたまふ過ちおはします。東宮は若くおはすれども、御心おきて情深く、礼儀を正しくしたまふときこえはべるによりて、参りつかうまつれり」ときこえさせければ、「東宮は我よりも心かしこきにや」と思して、E この事を思ひ止まらせたまひにけり。かかれば、呂后、陳平・張良よりはじめて、世にある人々、さながら心安くなりにけり。この趙の隠王の母に、戚夫人ときこゆる人は、帝を恨み、そねみたてまつりたまひけるを、呂后いやましく、心憂き事にぞ思しける。かかるほどに、帝はかなくなりたまひにければ、東宮、位につきて、よろづ御心に任せたりけれども、呂后、年ごろの御憤りにや、いつしか戚夫人を捕へて髪を剃り、かたちをやつして、あさましく心憂き様になしたまひつるを、帝、「F かからではべりなむ。この事、定めて先帝の御心に背くらむ」など、さまざまに諫めたてまつりたまへども、いかにもかなはざりければ、心苦しく思しつつ過ぐしたまふに、この趙の隠王さへうしなはむとしたまひければ、3 帝、夜も御側らに放たず起き臥したまひけり。后、ひまなき事を安からず思して、毒を入れたる酒を、この人に進めたまひけり。帝心得て、「まづ我」とのたまひければ、慌てて取り返しつ。かやうに人知れず、ねむごろにしたまひけれど、いかなるひまかありけむ、類なく力強き女房二、三人ばかりを遣はして、帝の御側らに臥したまへる4 人を、情なくつかみ殺してけり。上、あさましくは思しながら、いふかひなくてやみにけり。さて、この戚夫人、月隈なかりける夜、心憂く悲しきにつけても、昔の有様や思ひ出でられけむ、そのよしの詩を、何となく口ずさみたりけり。耳くせありける者これを聞きとがめて、「かかることなむはべる」と呂后に申したりけるに、いまひとしほの憎さまさりて、足手を切りつつ、その骸には漆を塗りて、よに汚らはしく、きたなき溝に浸して置かれたる有様の、そのものとも見えずあはれに悲しげなり。その後、こはき物の怪になりて、ほどなく呂后をとり殺したてまつりけり。5 これより先に、商山の四皓は、帝の御有様を心安く見なしたてまつりて後、いとまを申して、元の住みかへ帰りぬるを、世の人、譬へをとりて褒めていはく、「G 世の中、日照りに遭ひて、草木も枯れ、土さへ割けて、人の命も絶えぬべきに、一たび雨降りつつ、四方の梢を潤し、門田の稲葉も露しげく結びゐぬる後、八重の雨雲、山に帰りゐるなるべし」となむ言ひけるこそ、まことにさもとおぼゆれ。

（注）「四皓」…秦の末に、争乱を避けて商山（今の陝西省にある山）に隠棲した四人の老賢人のこと。

問一　問題文甲の傍線部A・C・Fの意味として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ニの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

A　イ　だからといって、恵太子が卑下をなさるとは限らないではないか。
　　ロ　もしそうなったら、この賢人たちも恵太子を尊敬なさるに相違ない。
　　ハ　いくらなんでも、呂后はよこしまな計略を断念なさることであろうが。
　　ニ　そうはいっても、帝はご自身の考えを、恥ずかしくお思いになるだろう。

C　イ　誰しもが見苦しい姿であると思った。
　　ロ　それぞれ不審なことだと思っていた。
　　ハ　めいめいが神秘的な存在だと感じた。
　　ニ　各人とも不都合な事態と考えていた。

F　イ　こうした事とは無関係であってほしいものです。
　　ロ　何も直接手を下されることはないと思います。
　　ハ　これほどまでなさらなくてもよいでしょう。
　　ニ　私にはお認めすることなどはできません。

問二　問題文甲の二重傍線部1～5の敬語表現について、それぞれ敬意の対象を確認した時、次のイ～トの中から、その対象者としては見出すことのできない人物をすべて選び出し、マーク解答用紙に答えよ。

イ　高祖　　ロ　呂后　　ハ　恵太子　　ニ　隱王　　ホ　陳平・張良　　ヘ　四皓　　ト　戚夫人

問三　問題文甲の傍線部B「その御心」とは、誰の「心」を指すか。最も適当なものを、次のイ～トの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　高祖　　ロ　呂后　　ハ　恵太子　　ニ　隱王　　ホ　陳平・張良　　ヘ　四皓　　ト　戚夫人

問四　活用語を文法的に説明した次のイ～ホの中から、問題文甲の傍線部Dには見出されないものを一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　四段活用する動詞の未然形。
ロ　打消の助動詞の連用形。
ハ　完了の助動詞の終止形。
ニ　ク活用する形容詞の連体形。
ホ　下二段活用する動詞の已然形。

問五　問題文甲の傍線部E「この事」とは、具体的にはどのようなことか。それを説明するために、左の空欄X・Yに入れるのに最も適当と考えられる八字以内の語句を、それぞれ傍線部Eより前の本文中に見出し、解答欄（記述解答用紙）にそのまま書き入れよ。

［　X　］を［　Y　］事

問六　問題文甲の傍線部Gが譬（たと）えている内容として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　国中の農民が熱心に働いた結果、今年は豊作となることが確実になったこと。
ロ　干ばつの被害もようやく収まり、民衆の生活に回復へのめどが立ったこと。
ハ　多くの人民が先帝の遺徳を慕い、宮殿の門前に集まって涙を流したこと。
ニ　陰で権力を争っていた人々は皆滅んで、懸念が完全に払拭されたこと。
ホ　優れた統治者が登場し、国家の将来も安泰であると確信されたこと。

問七　問題文甲に描かれている内容と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　高祖の後継をめぐって、恵太子と隠王の間には、激烈な争いが起こった。

ロ　呂后は、高祖の臣下を使って、敵対する者たちを次々と暗殺させていった。

ハ　恵太子が四皓に支えられていることに、高祖は大きな衝撃を受けてしまった。

ニ　戚夫人は詩の才に恵まれていたため、高祖の愛情を一身に受けることとなった。

ホ　四皓は心の底から呂后を援助したわけではなく、巧みに危険を避け商山へ帰った。

問八　問題文甲に引く『唐物語』中の一章段の典拠は、『源氏物語』にも大きな影響を与えたと考えられている。それでは、『唐物語』が成立した十二世紀に活躍した歌人で、勅撰和歌集の撰者となり、『源氏物語』を歌人が学ぶべき必須の古典と位置付けた人物とは誰か。次のイ～ホの中から選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　紀貫之　　**ロ**　宗祇　　**ハ**　二条良基　　**ニ**　藤原俊成　　**ホ**　源実朝

乙

〔次の文章は、問題文甲に関連する『漢書』の「張陳王周伝」の一節である。なお、傍線部および問題に関連する箇所の一部の送り仮名、返り点は省いてある。〕

漢十二年、上疾益ミ甚、愈ミ欲レ易二太子一。及二宴置酒一、太子侍。四人ノ者従二太子一。年皆八十有余。上怪、問曰、「何為者。」四人前対、各ミ言二其ノ姓名一。上乃驚曰、「吾求レ公、避二逃我一。今公何自従二吾児一游乎。」四人曰、「1陛下軽士善罵。臣等義不レ辱。故恐而亡匿。今聞二太子仁孝、恭敬愛レ士、天下莫2不延頸願為太子死者。故臣等来。」四人為レ寿已畢、趨去。上目送レ之、召二戚夫人一指視曰、「我欲レ易レ之、彼四人為二之輔。羽翼已成。難レ動矣。」戚夫人泣涕、上曰、「為我楚舞、3吾為若楚歌。」歌曰、「鴻鵠高飛、一挙千里。羽翼以就、横絶四海。横絶四海、又可奈何。」歌数闋、戚夫人歔欷流涕。上起去、罷酒。

（注）「上」…漢の高祖。　「四人」…四皓。　「頸」…くび。

問九　問題文乙の傍線部1に「陛下軽士善罵」とあるが、問題文甲の会話文の中から、これと同じ内容を含む一文を見出し、その最初の五字を**解答欄（記述解答用紙）**に記せ。なお、会話文を示すカギ（「」）は不要だが、読点や符号類がある場合には字数に含むこと。

問十　問題文乙の傍線部2「莫不延頸願為太子死者」につけるべき返り点として最も適当なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　莫乙不下延一頸、願中為二太子一死上者甲

ロ　莫下不三延一頸、願一為二太子一死者上

ハ　莫下不二延一頸、願一為二太子一死者上

ニ　莫乙不一延一頸、願下為二太子一死上者甲

問十一　問題文乙の傍線部3「吾為若楚歌」の意味として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　私が若者の代わりに楚歌を詠じてやる。
ロ　私はあなたのために楚の歌を唱おう。
ハ　私は楚の歌のごとき詩歌を詠もう。
ニ　私がとりあえず楚の歌を唱おう。
ホ　私がもし楚の歌を詠じたなら。

問十二　問題文乙の傍線部4「羽翼以就」は、具体的にどうなることを譬えているか。問題文乙の第二段落の中から、最も適当な語句を四字以上、八字以内で抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。なお、送り仮名や返り点は書かないこと。

（二）次に掲げるのは、夏目漱石が大正三年（一九一四）に書いた「素人と黒人」と題する文章の一節である（ただし省略箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

良寛上人は嫌いなもののうちに詩人の詩と書家の書を平生から数えていた。詩人の詩、書家の書といえば、本職という意味から見て、これほど立派なものはないはずである。それを嫌う上人の見地は、黒人の臭をにくむ純粋でナイーヴな素人の品格から出ている。心の純なるところ、気の精なるあたり、そこにすれからしにならない素人の尊さが潜んでいる。腹の空しい癖に腕で掻き廻している悪辣がない。器用のようでそのじつはおとならしい稚気に充ちた厭味がない。だから素人は拙を隠す技巧を有しないだけでも黒人よりましだといわなければならない。自己には真面目に表現の要求があるということが、芸術の本体を構成する第一の資格である。すでにこの資格を頭の裡に認めながら、なおかつ黒人の特色を羨むのは、君子の品性を与えられている癖に、［　1　］の修業をしなければ一人前でないと悲観するようなものである。

あるものを観察する場合に、まず第一にわが眼に入るのはその輪郭である。次にはその局部である。次には局部のまた局部である。観察や研究の時間が長ければ長いほど、だんだん細かいところが眼に入ってくる、ますます小さい点に気がついてくる。これはすべての物に対するわれわれの態度であって、ほとんど例外を許さないほど応用の広い自然の順序と見ても差し支えない。だから芸術の研究もまたこの階段を追って進んで行くに違いない。a所謂黒人というものはこの道を素人より先へ通り越したものである。そうしてそこに彼らの自負が潜んでいるらしい。彼らの素人に対する軽蔑の念もまたそこから湧いて出るらしい。けれどもそれは彼らが彼らの径路を誤解して評価づけた結果に過ぎないと、自分は断言して憚らない。2彼らの径路は単に大から小に移りつつ進んだのである。浅い所から深い所に達しつつあるのでもなければ、上部から内部に（立体的に）突き込んで行きつつあるのでもない。大通りを見尽くしたから裏通りを見る、裏通りを歩き終わったから、横丁や露路を一つ一つ覗いているという順序なら、たとい泥板の上を一軒一軒数えて廻っても、研究の性質に変化の来るはずがない。それを低い平面から高い平面に移されたように思うのは、所謂黒人のイリュージョンで、3平凡な黒人は皆このイリュージョンに酔わされているのである。単にこれだけなら彼らの芸術に及ぼす害毒はさほど大したものでないかも知れない。けれども彼らはこの甘いイリュージョンに欺かれて、大事なものはどこかへ振り落として気がつかずにいるのである。

観察が輪郭に始まって漸々局部に移って行くという意味を別の言葉で現わすと、観察が輪郭を離れてしまうということに帰着する。離れるのは忘れる方面へ一歩近寄るのと同然である。しかもその局部に注ぐ熱心が強ければ強いほど輪郭の観念は頭を去るわけである。だから黒人は局部に明るい癖に大体を眼中に置かない変人に化けてくる。そうして彼らの得意にやってのける改良とか工夫というものはことごとく部分的である。そうしてその部分的の改良なり工夫なりが毫も全体に響いていない場合が多い。大きな眼で見ると何のためにあんなところに苦心して喜んでいるのか気の知れない小刀細工をするのである。素人は馬鹿馬鹿しいと思っても、先が黒人だと遠慮して何もいわない。すると黒人はま

すますゾウチョウしてただ細かく細かくと切りこんで行く。それで自分は立派に進歩したものと考えるらしい。高い立場から見下ろすとこれは進歩でなくって、堕落である。根本義を棚へ上げておいて、末節にばかり齷齪する自分の態度に気がついたら黒人自身もしか認めなければなるまい。

素人はもとより部分的の研究なり観察に欠けている。その代り大きな輪郭に対しての第一印象は、この輪郭のなかで金魚のようにあぶあぶ浮いている黒人よりは鮮やかに把捉できる。黒人のように細かい鋭さは得られないかも知れないが、ある芸術全体を一眼に握る力において、糜爛した黒人の眸よりもたしかに澄澈としている。[5]。

ある芸術の門を潜る刹那に、この危険はすでにその芸術家の頭に落ちかかっている。虚心に門を潜ってさえそうである。与えられた輪郭を是認して、これは破れないものだと観念した以上、彼の仕事の自由はとうてい毫釐の間をうろついているに過ぎない。だから在来の型や法則を土台にして成立している保守的の芸術になると、個人の自由はほとんど殺されている。その覚悟でなければはいるわけに行かない。能でも踊でも守旧派の絵画でもみんなそうである。こういう芸術になると、当初から輪郭は神聖にして犯すべからずという約束の下に成立するのだから、その中に活動する芸術家は、たとい輪郭を忘れないでも、忘れたと同じ結果に陥って、ただ[6]の間でおのれの自由を見せようと苦心するだけである。素人の眼は、この方面においても、一目の下に芸術の全景を受け入れるという意味から見て、黒人に優っている。

こうなると俗にいう黒人と素人の位置が自然顚倒しなければならない。素人が偉くって黒人がつまらない。ちょっと聞くと不可解なパラドックスではあるが、そういう見地から一般の歴史を眺めてみると、これはむしろ当然のようでもある。昔から大きな芸術家は守成者であるよりも多く創業者である。創業者である以上、その人は黒人でなくって素人でなければならない。人の立てた門を潜るのでなくって、自分が新しく門を立てる以上、純然たる素人でなければならないのである。

自分はまだいうべきことがたくさん残っているように思うけれども、急いでこの稿を書き上げなければならない事情があるので、これだけにしてひとまず筆を措く事にする。ここにいう黒人というのはむろんただの黒人をさすので、素人というのは芸術的傾向を帯びた普通の人間をいうのである。[8]つまらない素人になれば局部も輪郭もめちゃめちゃで解らないのだから、そんな人々は自分の論ずる限りではないのである。

問十三　空欄[1]・[6]に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

1　イ　手枷足枷　　ロ　手古舞　　ハ　手弁当　　ニ　手前味噌　　ホ　手練手管

6　イ　五十歩百歩　　ロ　五臓六腑　　ハ　五体投地　　ニ　五分五分　　ホ　五里霧中

問十四　傍線部aの漢字の読みをひらがなで、bのカタカナを漢字で、それぞれ解答欄（記述解答用紙）に記せ。ただし漢字は楷書で正確に書くこと（乱雑な文字や字画の曖昧な文字などは不正解とする）。

問十五　傍線部2「断言して憚らない」の意味として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　断言せざるをえない。

ロ　断言して後悔しない。

ハ　思い切って断言する。

ニ　遠慮なしに断言する。

ホ　決して断言できない。

問十六　傍線部3に「平凡な黒人（くろうと）」、傍線部7に「ただの黒人（くろうと）」とあるが、「平凡な黒人」「ただの黒人」とは具体的にどのような人を指しているか。その最も適当な説明を文中から二十字以内で見出し、その最初の三字と最後の三字を**解答欄（記述解答用紙）**に記せ。

問十七　傍線部4「黒人（くろうと）自身もしか認めなければなるまい」の意味として最も適当なものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　黒人自身がしっかりと認めなければならないだろう。
ロ　黒人自身がそのように認めなければならないだろう。
ハ　黒人自身ある場合には認めなければならないだろう。
ニ　黒人自身もしかたなく認めなければならないだろう。
ホ　黒人自身もそれだけは認めなければならないだろう。

問十八　空欄 **5** には、「富士山の全体は」で始まる三十字以内の一文が入る。ふさわしい表現を考えて、**解答欄（記述解答用紙）**に記せ。ただし句読点は使用しないこと。文字数だけで三十字ちょうどになってもよい。

問十九　空欄 **8** に入る最も適当なものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　偉い黒人になれば局部に明らかであると同時に輪郭も頭に入れているはずであるし、
ロ　偉い黒人になればまず局部から眼に入って輪郭の観察に及んでいくはずであるし、
ハ　偉い黒人になれば局部も輪郭もまったく区別がなくなってしまうはずであるし、
ニ　偉い黒人になれば素人には及ばないほど局部のみにこだわるはずであるし、
ホ　偉い黒人になれば素人のように輪郭だけを観察すれば足りるはずであるし、

問二十　本文の趣旨と合致するものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　芸術において観察が輪郭を離れて局部に移って行けば行くほど、精密な小刀細工を仕上げるように芸術的な価値は高まるが、その反面で輪郭の観念を忘れてしまうから全体的な統一感は失われる。
ロ　自然の観察や研究と同じように、芸術の研究もまず輪郭から局部へと進んでいくことになるが、局部にこだわるあまり輪郭を忘れてしまいがちになるという点では素人も黒人もかわることがない。
ハ　自然の観察や研究と芸術の研究が異なるのは、自然の観察においてはまず輪郭から局部へという順序を踏むが、芸術の研究においては与えられた輪郭を是認するところから出発するという点である。
ニ　黒人はしばしば、長年の修業によって素人には及ばない高さと深さの境地に達したというイリュージョンに酔うが、実際にはより細かく小さい点に気がつくようになっただけであることに思い至らない。
ホ　みずから新しい門を立てようとする芸術家は常に素人であり、人の立てた門を虚心に潜ろうとする素人はむしろ黒人に近いから、ここに素人が偉くて黒人がつまらないという不可解なパラドックスが生じる。

問二十一　この文章は、大正五年（一九一六）に亡くなった漱石の晩年の作品だが、同じく大正期に入ってから書かれた漱石の小説を、次の**イ**～**ホ**の中から二つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　三四郎　　**ロ**　坊っちゃん　　**ハ**　道草　　**ニ**　明暗　　**ホ**　吾輩は猫である

（三）次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

ふだんは当たり前に思っていても、問われて答えようとするとなかなか奥行き深いことのわかる問題がある。たとえば、歌に二番があるのはなぜだろうという問題がそれである。歌はふつう、どうして一番だけで終わらないのだろうか。どうして私たちは一番だけで満足しないのか。一番がだめだというのではない。むしろ、その反対である。一番がだめなら二番などありようがなく、もうウンザリしてやめるはずだからだ。ということは、一番はじゅうぶんに素敵なのである。それなのに二番が欲しくて、歌詞をかえて繰り返したいのだ。素敵だからこそ繰り返したい？　いや、繰り返すことで素敵になるのではなかろうか。なぜなら、一番がほんとうに素敵だったら、つまり完全かつ完璧だったら、やはりそれはそこで終わりになるはずだからだ。

ここで問題をやや一般化してみよう。ふつうは何といっても一番が素晴らしいのである。一番こそが物事を始め、礎（いしずえ）を置き、形をつくったのだ。要するに、それが一番始めにそうした地点に到達したのだ。しかし裏を返せば、それはまだ危うい、つくられたその形は完成しているどころか、ひょっとしたら崩れかねないということでもある。そうなると、二番は傷つきやすく壊れやすい一番を支えようとするか、あるいはそうした一番を乗りこえよう、場合によっては否定しようとするだろう。［A］は［B］のような［C］から［D］を守りたいのである。それに対して［B］は自分が確実な［D］になりたいのだ。これら両者は一見すると正反対の立場にありながら、［D］ということに価値を置いている点では同じである。やはり一番は一番であり、二番は所詮（しょせん）二番で、単なる付け足しにすぎないのだろうか。

この問題をもう少し突き詰めるために別の角度から見てみよう。一番と二番の関係をオリジナルとコピー、教祖とその弟子、二代目あるいは反逆者という枠組みの中で考えてみるのである。つまり、オリジナルや教祖という一番目のものがなければ、むろん二番目であるコピーや弟子は存在しない。しかし、どうだろう。そのことは逆に、二番があるから一番がある、と言い換えることができないだろうか。突出した一番だけというものは存在しない。突出するという事態が、突出されるもの、突出を支えるものを前提としている。信奉者をいっさい欠いた教祖は、教祖であるどころか単に常軌を逸した人であるだけだろう。また、[1]オリジナルがあるからコピーするというよりも、コピーするという行為がオリジナルをオリジナルとして成立させるということもできる。

さらに、ここでスポーツの事例を考えても同じようなことが言える。時空の区切られた枠内での遊戯行為の反復、他者との競合と協力、そして二回目以降の継続性ということがなければ、自分こそがこのスポーツで一番だといっても、それは［E］以前の手前勝手なママゴトだろう。いや、ママゴトにもならない。ママゴトもまた模倣反復の産物であるからだ。こうして見ると、一番という価値は、二番がつくったものであることがわかる。この意味において、二番にはそれ自体に価値があるというべきだ。

ここで歌の場合に戻ってみよう。ウタとは語源的に「自分の気持ちをまっすぐに表現する意」（『岩波古語辞典』）であるという。そうだとすると、なぜすっきり歌って一番で終わりということにならないのだろうか。一度では意が通じがたいから？　それとも意が通じた以上、お返しに喝采が欲しいから？　いやいや、自分のまっすぐな気持ちといっても、それは決して独創のものではなく、共同体の内部で育まれたものである以上、それをふたたび共同体の方へ返して、ほら、私があなたがたから貰ったものはこれです、これはあなたがたの内部に元からあったものですと感謝の意を述べたいから？　それともそれはむしろ、共同世界の側からの回収行為に促されて致し方なくお返ししたもの？　いずれにせよ、そうした互恵互酬の行為が共同体を維持させるから？

いろいろな思いが湧くが、ここで反復の反対概念、すなわち［F］性ということを不可逆性という概念に結びつけてみよう。するとこう考えられないだろうか。何かがたった一度だけ起きて過ぎ去り、それが二度と戻らないということは、悲しいとか、いや、むしろさっぱりするとかいう以前に、不確かで不安なことである。それは起きたといっても、終わったあとでは夢のように儚（はかな）いのだ。ほんとうにそれが起きたことすら疑問になってくる。私事で恐縮だが、筆者の父は母に先立たれてひとりになったとき、過ぎし日々を夢のようだと言っていた。誰しも晩年に至ればそのように思うのではなかろうか。それ自体としては繰り返しの行為を多く含む人生、否、ほとんどが繰り返しから成っている人生も、その終わりに近づいたときは唯一無二のものであることがしみじみと感じられる。

これはつまり、行ったきりで戻らないという不可逆性が［G］性とは相容れないということである。かくて人生、夢の如し。『死』という大著で有名なフランスの哲学者ジャンケレヴィッチは『還らぬ時と郷愁』という本の中で、「往復ということがひとつの存在を物体にする」と書いている。行くだけではなく戻ってこないと物事は確かなものにならない。歌の二番はまさにこの帰還であるといってもよいだろう。しかし、ここで落とし穴に気をつけなければならない。ジャンケレヴィッチの言葉は、何かが確実であることを求めるとそれを物として扱いかねないということをも意味している。人生の悲劇がここに生じかねない。

筆者は否応なく、黄泉の国にエウリュディケをたずねたオルフェウスや、イザナミをたずねたイザナキのことを思い出す。かれらは「見るな、ふりかえるな」という禁止を破ったために、永遠に伴侶を失った。神話だけではなく、近代の作品にも同じようなことが描かれている。たとえば、十九世紀末ベルギー象徴派詩人ローデンバックの小説『死都ブリュージュ』の主人公ユーグは、亡き妻と瓜ふたつであることを踊り子ジャーヌに求めたがために、彼女を殺す羽目に陥った。二十世紀の映画においてもヒッチコックの『めまい』の主人公スコティーは、死んだと思った愛するマデリンの影に固執し、その影を実体化しようとしたため、マデリンとそっくり同じに見えるが別の女性、しかしじつはマデリンを演じていたジュディを殺してしまった。かれらはみな同一なものの反復に固執したのであり、それによって相手を物体として扱い、結局は死に至らしめたのだ。

さて、これが歌の二番、あるいは一般にいう二番とどう関係するだろうか。歌における二番あるいは繰り返しは、同一なものの反復ではない。歌は一定の意味をもった命題を述べ、それを確実にするために繰り返すのではない。そのようなことをするのは歌の自殺行為である。内部を固め、外部を侵し、外を内へ取りこもうとするような歌、言い換えれば、物足りないから物をもっと得ようとするような歌は、歌というよりむしろ号令かお題目のようなものである。歌は本来、帰一するのでなく、のびひろがってゆく。つまり歌は［H］的ではなく［I］的なものであり、［J］するのではなく［K］するのである。だからこそ、歌は時代と国境をこえて歌い継がれる。これが歌に二番のあるほんとうの理由ではなかろうか。そしてこのことは歌の二番だけの問題ではなく、あらゆることの二番にも当てはまるのではなかろうか。二番は人に新たな境地へ踏み出して、世界を何度でもつくり直すことを勧めている。

問二十二　空欄［A］・［B］・［C］・［D］に入る最も適当な語句を、次のイ～ヘの中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　両者　　ロ　前者　　ハ　後者　　ニ　一番　　ホ　二番　　ヘ　三番

問二十三　傍線部1「オリジナルがあるからコピーするというよりも、コピーするという行為がオリジナルをオリジナルとして成立させるということもできる」の説明として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　オリジナルとコピーは内容の上では変わりがないので、コピーがオリジナルに代わってもかまわないから。

ロ　誰かがオリジナルをコピーすると、他の人もコピーをしたくなって、どんどんオリジナルの権威が高まるから。

ハ　コピーするという行為はあまり望ましいことではなく、したがってオリジナルの立派さが相対的に目立つから。

ニ　歌の場合でも二番が歌われるとますます印象が強まって、結局は一番の歌詞がよく記憶されることになるから。

ホ　コピーする者がいないオリジナルは、弟子のいない教祖が教祖とはいえないように、とうていオリジナルとはいえないから。

問二十四　空欄 E に入る諺（ことわざ）・成句として最も適当なものを、次のイ～ヘの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　緊褌（きんこん）一番
ロ　お山の大将俺一人
ハ　魚木に登るが如し
ニ　木を見て森を見ず
ホ　山高きが故に貴からず
ヘ　一を知って二を知らず

問二十五　空欄 F に入る最も適当な語句を、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　一過　ロ　無限　ハ　差異　ニ　絶対　ホ　一回

問二十六　空欄 G に入る漢字二字の語句として最も適当なものを、文中より抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。ただし漢字は楷書で正確に書くこと。

問二十七　空欄 H ・ I および空欄 J ・ K には、それぞれ対照的な意味を持った語句が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、次のイ～ニの中からそれぞれ一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

H ・ I

イ　統一・分裂　ロ　集権・分権　ハ　求心・遠心　ニ　理性・感情

J ・ K

イ　拘束・放置　ロ　収束・発散　ハ　干渉・放任　ニ　収縮・膨張

問二十八　問題文の趣旨と合致しないものを、次のイ～ホの中から二つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　二番があるのは何といっても一番があるからであり、したがって価値の源泉はやはり一番にある。
ロ　二番というものは必ずしも一番のものに従属するのではなく、それ自体が独自の価値を持ちうる。
ハ　私たちが歌の二番をうたうのは、一番だけではまだ頼りない心情を確かなものにするためだけではない。
ニ　歌は一番だけで終わるほうが名残惜しい気持ちをかき立てて、かえって印象を強める結果になるので望ましい。
ホ　二番のない一番だけというもの、つまり繰り返しのない唯一無二なものは、その存在すら不確かに思われることがある。

〔以　下　余　白〕